

## 平成28年度パラムーブメント推進フォーラム 議事録

日時 平成29年2月8日(水)午後2~4時

会場 第4庁舎4階第1・第2会議室

出席者

【委員】 福田市長(委員長)、成田委員(共同委員長)、中森委員(顧問)、遠藤委員、大塚委員、小倉委員、菊地委員、北西委員、島委員、杉山委員、須藤委員、瀬戸山委員、土岐委員、中澤委員、北條委員、山田委員、横島委員

【事務局】 唐仁原市民文化局長、市民文化局オリンピック・パラリンピック推進室 原室長、山本担当課長、佐藤課長補佐、鴻巣担当係長、木田職員、市民文化局市民スポーツ室 杉山室長、高橋担当課長、市民文化局市民文化振興室 中村室長、経済労働局観光プロモーション推進課 露木担当係長

開会

(原オリンピック・パラリンピック推進室長)

ただいまから平成28年度のかわさきパラムーブメント推進フォーラムを開催させていただきますと思います。本日全体の進行を務めさせていただきます、オリンピック・パラリンピック推進室長の原でございます。どうぞよろしくお願いいたします。

議事に入る前に、いくつか事務連絡をさせていただきたいと思います。本日のフォーラムですが、会議公開条例に基づき公開となっておりますので、傍聴を許可しておりますことをご了承していただければと思います。議事内容等につきましては発言内容、また発言者の氏名等も含めて、後ほどホームページ等で公開させていただきますので、そちらもご了承していただければと思います。また、傍聴の方々につきましては、会場に掲示してあります遵守事項をお守りいただければと思います。

本日、天野委員、日比野委員、ロー委員、そして急きょ中村委員が欠席のご連絡をいただいております。また、島委員につきましては30分程度遅れるという事前のご連絡をいただいておりますので、このまま進めさせていただければと思います。

まず、配布資料を確認させていただきます。皆さまのお手元に次第がございます、次第に続きまして本フォーラムの運営要綱、委員名簿、その次にカラーの資料1という資料がございます、次にA4の資料2というアンケート結果という資料がございます。その後にA3の資料3。ここまでが議事に関わる資料でございます。特に資料漏れとかないでしょうか。

それでは開会にあたりまして、委員長の福田市長の方からご挨拶をお願いしたいと思います。

(福田市長)

こんにちは。大変お忙しい中、パラムーブメント推進フォーラムに参加をいただきましてまことにありがとうございます。前回の開催からだいぶ日にちがたっておりますけれども、この間の動きでもっとも大きかったのは、なんといってもリオデジャネイロオリンピック・パラリンピックで、共同委員長の成田真由美さんがパラリンピックで大変なご活躍をされて、記録をまた塗り替えられた。本当に川崎市民のみならず、日本国民にとどまらず、多くの人たちが勇気をいただいた素晴らしい記録を出してくださって、そのことに改めて同じテーブルを囲んでいる者として本当にうれしく誇りに思いました。川崎市としても表彰させていただいて、市民の皆さんと喜びを分かち合ったところですので、本当にありがとうございます。

(成田共同委員長)

ありがとうございました。

(福田市長)

それから、昨年秋、11月になりますけれども、私と商工会議所会頭であり国際交流協会の会長もされております山田委員、それと市議会議長と一緒に、ロンドンに視察に行っておりまして、英国オリンピック委員会とパラリンピック委員会の委員長をはじめ、役員の皆さんと意見交換し

てきました。特に印象深かったのは、パラリンピックで社会変革を起こしたことについて意見交換をさせていただいたり、いろんな施設も見せていただきました。オリンピック・パラリンピアンが活動する施設は、本当に同じ施設の中でオリンピックもパラリンピアンもトレーニングをしていると。まさに混ざり合っているということに非常にびっくりしましたし、すごく環境の素晴らしさというか、栄養士さんもいれば、いろんな専門職種の方がオリンピックもパラリンピアンも支援している。そのチームの体制ができた驚きと素晴らしさというのを感じさせていただきました。いつも成田委員もおっしゃるんですけども、すべての施設がバリアフリーではないんですね。ロンドンも「バリアフリー」なんだけども、それを取り巻く人たちのバリアフリーがしっかりできているということを実感できました。

学ぶべきことがたくさんあるなと思いましたけども、パラリンピックの委員長とか役員の皆さんと話した時に、僕は「こんなに大変なんだ、やることいっぱいあるな」って悩んでいたら、そしたらまず叱られた。「そういうふうには考えちゃ駄目ですよ、ポジティブチャレンジということが大事です」と。前向きにとらえて、世の中を変革するいいチャンスだというふうにとらえて、みんなが取り組む。楽しく取り組むというか、前向きに取り組んでいくことが大事なので、そういう姿勢でやっていかないとしっかりとしたものがないし、レガシーも残せないですよ、と言われて、なんとなく分かっていたつもりが改めて分かってなかったということを実感しました。あらゆる場面で市民の皆さんにも、あるいは職員にもこの「ポジティブチャレンジ」の話をしております。

「かわさきパラムーブメント」も、今年はしっかり具体的かつ数値目標も入れ目標を立てて、着実に進めなければならないと思っておりますので、今までややふわっとしていたかもしれませんが、これからはしっかりと前に動かす、実行を積み上げていくということをやりたいな、と思っておりますので、どうぞよろしく願いいたします。ありがとうございました。

(原オリンピック・パラリンピック推進室長)

ありがとうございました。続きまして、今お話にも出てきましたが、共同委員長の成田委員より一言ご挨拶をいただければと思います。

(成田共同委員長)

皆さんこんにちは。去年無事にリオパラリンピックを終えることができました。マスコミの方に年齢ばかり取り上げられて、46歳成田ということが四文字熟語になって放送されてしまったんですけども、日本新記録を出して、決勝に残ることができたことは自分にとって大きな喜びで、厳しい戦いに自分が臨むことができたということがすごく良かったなと思っています。リオに行く前はリオは危ない所だとニュースなどで流れていましたが、行ってみるとこんなにも大勢の人たちが他国の私の応援も含めて、精一杯応援してくれるっていうことにすごいな、日本人もここまで応援ができるかな、っていうくらい大きな声援を受けることができました。そして毎回思うんですけど、やっぱりボランティアさんの力が必要なんだなって思いました。ですので、この「かわさきパラムーブメント」を通して、川崎市民の方にもパラリンピック一緒に盛り上がり行こう、ということも必要になってくるんじゃないかと思っていますので、どうぞよろしく願いいたします。

(原オリンピック・パラリンピック推進室長)

ありがとうございます。次に、フォーラム委員の団体役員の交代に伴いまして、お一人変更がございますので、ご挨拶をいただければと思います。川崎市スポーツ協会の北西委員、よろしく願いいたします。

(北西委員)

川崎市スポーツ協会の事務局長をやっております、北西と申します。今年度からこのフォーラムに参加させていただきましたので、よろしく願いいたします。

(原オリンピック・パラリンピック推進室長)

よろしく願いいたします。なお、オリンピック・パラリンピック推進室についてですが、昨

年4月にできた組織でございますので、要綱等が一部改正されております。資料を添付してございますので、後ほどご参照ください。

それでは会議の進行につきましては委員長の福田市長が務めさせていただきますので、ご了承のほどよろしくお願いたします。また共同委員長の成田委員には会議の進行等の補助していただければと思いますので、どうぞよろしくお願いたします。それでは福田市長、議事進行をよろしくお願いたします。

(福田市長)

それでは議事に入ります。次第2でございますけど、この資料1の「かわさきパラムーブメント推進ビジョン(第1期)の進捗状況について」をご覧くださいと思います。

昨年度このフォーラムで委員の皆さまにご協力いただきまして、昨年3月に推進ビジョンを策定いたしました。ビジョンでは5つの方向性をうたっております、その方向性に沿って、推進ビジョンに基づく取組や、フォーラム発のリーディングプロジェクトなど、「かわさきパラムーブメント」の取組を幅広く展開しております。そのような取組の状況について資料1でまとめましたので、まず全体像を事務局からご報告し、個別の取組については委員の皆さまのコメントもいただけてまいりたいと思います。それでは、事務局より報告をお願いします。

(山本オリンピック・パラリンピック推進室担当課長)

資料1、「第1期かわさきパラムーブメント推進ビジョンに基づく平成28年度の取組状況について」をご覧ください。まず、推進ビジョンの概要といたしまして、政策領域を幅広く捉える5つの方向性の設置。推進ビジョンの取組機関として3つのフェーズを設定。その中で、フェーズIとする第1期推進期間につきましては、今年度と次年度の2年間を「開催につなげる取組機関」としてございまして、右側枠囲いの取組の方向性として、「かわさきパラムーブメント」を中心とした東京2020大会に向けた本市のビジョンの共有化、取組の基礎となるネットワークやしくみづくりを重点に推進することとしております。

中央の枠囲いには、「ひとづくり」から横方向に5つの方向性を示しております。また、資料の縦方向には「推進ビジョンに掲げる主な取組」「5つのリーディングプロジェクト」「委員からの取組提案」という形で整理しております。また、各項目についております、白と黒の丸・四角の印のうち、黒い項目につきましては2ページ以降に具体的な取組状況を整理しております。

今年度は5つのリーディングプロジェクトとして、「パラムーブメントの理念の浸透」につきましては、昨年11月に市職員や市内事業者・団体向けにユニバーサルマナー講演会を開催。12月にはシンポジウムを開催し、かわさきパラムーブメントの考え方を広く共有したところでございます。次に、「アクセシブルシティかわさき」につきましては、市内ぐるなび加盟飲食店のバリアフリー状況を調査するとともに、利用者の参考となる情報発信方法等について調査・検討を継続しております。次に、「インクルーシブなカワサキハロウィン」につきましては、昨年10月のハロウィンパレードにおいて、初めて車いす利用者の方も参加できるよう、取り組んだところでございます。次に、「パラスポーツやってみるキャラバン」につきましては、市内13校の小学校をはじめ、地域の寺子屋などにおいて計23回の障害者スポーツ体験講座を実施し、障害者への理解、学校や地域の障害者スポーツへの関心を高める機会を創出いたしました。次に、「宿泊施設等のバリアフリー化促進」につきましては、市内20ヶ所のホテル・宿泊施設や、日本民家園などの生田緑地内の文化施設のバリアフリーに関する現状調査を行い、基礎データを収集し、今後の展開につなげてまいります。

また、下段の委員からの取組提案につきましては、リーディングプロジェクトと合わせて、後ほど各委員からのコメントをいただきたいというふうに考えております。

続きまして左下の「平成29年度の取組の方向性」でございますが、推進ビジョンに掲げる取組を引き続き推進し、リーディングプロジェクトの成果の検証、取組の充実・ステップアップを図るとともに、委員提案の取組につきましても、既存事業の中にエッセンスを取り込みながらモデル事業の共同実施などを通じて、パラムーブメントの取組を強化してまいります。また、平成29年度は、平成30年度から開始期間となる第2期推進ビジョンを策定いたします。策定に向けましては、ビジョンに掲げる取組のうち、可能なものについて数値目標を設定するなど、レガシーの形成に向けた「見える化」を進めてまいります。説明は以上でございます。

(福田市長)

それでは、資料1の1ページ目について何かご質問・ご意見などございますでしょうか。全体的なこととしてはよろしいですか？

それでは2ページ以降なのですが、これ各分野の具体的な取組状況について確認していきたいと思うのですが、進め方についてですけれども、まずリーディングプロジェクトや、委員提案として取組に関わっていらっしゃる委員に、この関連する取組の概要をご説明いただいて、次に全体で取組状況の共有を図っていききたいというふうに思っています。その後、事務局からその他の取組についてまとめて報告、という方向で進めていきたいと思っておりますけれどもよろしいでしょうか。

それでは、取り組んでいただいている委員からそれぞれご発言をいただくという形で、順次ご説明をいただいてもよろしいでしょうか。では1は須藤委員、お願いいたします。

(須藤委員)

改めまして、皆さんこんにちは。須藤シンジと申します。NPOのピープルデザイン研究所という団体の代表でございます。私どもは今般のパラムーブメント、この考え方の中でスポーツという切り口におきまして、「やる人・観る人・支える人」と大きく3領域あるかと思うのですが、どちらかというところの「支える人」に関連する切り口での活動を、川崎市においてここ2年ほど継続して展開しております。

1の項目、障害のある方の就労体験というところですが、障害者法定雇用率2%の完遂の有無が叫ばれている一方で、そもそも障害における手帳をお持ちの方、約6%というふうに言われています。どちらかというところ、楽しいスポーツのステージで、川崎市で言うとフロンタールのJリーグが非常に分かりやすいコンテンツではございますが、おおむね100人のスタッフが毎回働いていらっしゃいます。ここに、健康福祉局の皆さんとタイアップをいたしまして、地域の就労支援事業所に通う、知的・精神の方を中心におおむね6%。従いまして、各試合6人のアベレージといたしまして、働いてみないかということで。比較的従来、障害者を招待するという脈路が強く施策としては展開されてきた中で、もてなされる側じゃなくてももてなす側に仕事として回っていただく、という形の活動を展開いたしました。体育会系ではフロンタールのイベントがございまして、文化系ではハロウィンパレードなんかを、安全誘導係みたいなコンテンツも働くフィールドとしてご用意してまいりました。この活動を川崎市で主に展開して2年たつんですが、1年目の昨年3月末までは、延べ436名の皆さまがご参加されました。障害者の方ですね。今年は一応来月末までで500名の参加を予定しています。これ、おおむね4時間の就労という切り口でお時間を頂戴し働いていただき、2000円の交通費を支給するという構造の取組でございます。成果といたしましては2つございまして、1つは1年目の昨年、この経験をきっかけに経験者の方の10人が面接に一般企業に行くモチベーションを上げ、正規雇用を果たしたと。2年目の今年については12月末の段階で9名の方が正規雇用にいたっているということで、恐らく昨年の実績値越えはおおむね見えている現状です。ここに加えて、東大の先端研究所の近藤先生と川崎市さんとまたお力をいただきまして、今度は超短時間雇用と称して、できる時間にできることをやって、適正なバイト代を、最低賃金を払っていくという取組を、健康福祉局の皆さんと加速させているところです。このフォーマットを、来たるべき2020を1つのメルクマークに、川崎市発の働く1つのきっかけとしてのスポーツのあり方という前提で、盤石な仕組みにしていきたいと考えています。以上です。

(福田市長)

はい、ありがとうございます。3番目も委員提案で、これも引き続き須藤さんですね。

(須藤委員)

おおむね今お話しした内容となります。

(福田市長)

そうですね。失礼しました。それでは、7番目の「かわさきパラムーブメント」の理念の浸透の取組ということで、成田委員と中森委員、お願いします。

(中森顧問)

はい。私自身はパラムーブメントシンポジウムにおいて、パラリンピックの基礎知識というところで講演をさせていただきました。その後、成田委員含めパラスポーツに関わる人たちでのパネルディスカッションに参加しました。この後、見ていただいたら分かるように、アンケートの結果を見るとやっぱり基本的なことがよく理解されていないという状況の中で理解が進んだということと、積極的にパラリンピック、パラ障害者のスポーツっていうところに関心が向いたような、そういう回答が多かったのが非常に良かったかなと思いました。ただ、川崎市民が参加の割合が低かったかなと。川崎市以外からの参加者が多かったような感じを受けました。こういうムーブメントが広がって、障害のある人のスポーツの参加であるとか、外出の機会が増えるとか、そういうふうにつながっていけばいいのかなと思います。今回のプログラム、全体的に見るとやっぱり当事者がスポーツに参加できるような、そういう取組がちょっと抜けているような気がするので、遠藤委員とか成田委員とかが取り組まれている身近なところでスポーツに参加できる、そういう環境を今後もう少し含めていければいいかなと思います。

1つは、遠藤委員がいらっしゃるのでね、例えば足をなくした子どもが義足をつけている。で、生活用の義足は福祉でサポート、補助を充てる。でもその義足で運動ができるかと言うとそうじゃないんですね。で、その義足を作る時にちょっと強度のある義足を作って、足の先だけスポーツができる場面において少し変えるとかね。そういう取組が進んでいったらいいかなとは思っています。提案はしているんですけど、そう簡単に動かないので、市レベルであればできるかなと。特に子どもたちがスポーツに参加できる場面をもっともっと広げる。例えば、足がない子はそういうことでできるだろうし、あと車いすに乗ってる子どもたちは、同じように生活用の車いすを福祉で補助というか、支援・サポートが受けられることが可能なんだけど、じゃあスポーツ用の車いすはっていうと自己負担になるわけですね。やっぱり教育とか体育とか、その子にとってスポーツの重要性が行政の考え方であるのであれば、スポーツ用の義足も同じように支援する仕組みをとってもらえたらありがたいかなと。この2つは考え方とか、あとはたぶん和歌山ではスポーツ用の車いすの補助を出してるケースがあるんですよ。体育で必要だから、教育で必要だからっていう。そういうようなのもおいおい提案できればいいかなと思います。以上です。

(福田市長)

ありがとうございます。それでは、成田委員、よろしくお願いします。

(成田共同委員長)

私は、オリンピックの派遣によるスポーツ教室の実施ということがあったんですけど、やはりパラリンピックの発掘というのもすごく切に感じています。障害者のパラリンピックの派遣によるスポーツ教室の実施がもしあったら、そのあと参加者の連絡先を聞いてフォローしていかないと、一過性のスポーツ体験だけで終わらせたくなくて、やっぱり選手としても続けてほしい、スポーツとしても続けてほしいと思うので、そういうフォローも必要になってくるかなとは思っています。

あとはやっぱり子どもたちと触れ合うと、ほんとに純粋に「楽しい」とか「歩ける僕よりも成田さんの方が速いってすごいよね」とか。そうやって子どもたちに気付いてもらえる、そういうきっかけ作りっていうのを、この市内でどんだんやっしていきたいなって思っています。実際、リオに行く前に講演に行った学校の子どもたちが私を応援してくれて、先日リオが終わった後にたまたま街で偶然会ったら、「成田さん、テレビで応援してたよ」とか言ってくれて、「成田さんテレビ映ってた」「うん、46歳成田って出てた」みたいな感じで。

でもそれはそれで子どもたちが応援してくれるっていうことが純粋にうれしかったし、子どもたちはパラリンピックを見てくれたし、成田真由美を応援してくれたって、そういうきっかけ作りがもうほんとに身近なことで、大切なことなのかな、なんてことを思ったので、やっぱり多くの子どもたちとこれからも接していきたいので、そういう接点を川崎市さんには作ってもらいたいなと思っています。

(福田市長)

ありがとうございます。それでは、次の3ページの1、2を横島委員のからお願いします。

(横島委員)

川崎市身体障害者協会の事務局長の横島と申します。よろしく申し上げます。  
まず1の「障害者スポーツ推進組織の強化」ということですが、これは平成27年度にスポーツ協会の設立準備というところから始まって、市内のスポーツ団体の方々を含めて準備委員会を組織しました。平成27年の10月19日、全国障害者スポーツ大会の派遣のための出発式を行った日なのですが、この日に間に合うように立ち上げたというところではあります。

設立準備の中で、川崎市内に19の障害者のスポーツ団体があるんですけども、そこにぜひ障害者スポーツ協会に加盟してくれというご案内をしたところ、設立当初は8つの団体が手を上げていただきました。お手元にクリアファイルがあると思うんですけども、この裏側にその加盟団体、今は10団体に加盟していただいているところではあります。

このスポーツ協会を設立したことについては、どこかで宣伝をしなくてはならないでしょうということで、平成27年11月の市民まつりの際に、富士通スタジアム川崎でいろんな団体が入っているブースの中の1つとして、障害者スポーツであるフライングディスクの体験をしていただくというようなことをやりました。そのあと、スポーツ協会としては昨年のやはり市民まつりの時に、同様にキャッチアップさせようということで、やはりフライングディスクのブースを設けてやってきたところではあります。

次の「誰でもスポーツ広場」というところなんですけれども、ここもやはり富士通スタジアム川崎を使って、屋外の競技を広めようということで、障害者のスポーツ指導者協議会ですとか、フライングディスク、ペガールボール、それからCPサッカーの団体、市内のファンズアスリートクラブ等の方々にお手伝いをいただいて、全部で10種目くらいのいろんな競技をブースに分けて行ったところではあります。この8月21日っていう日がすごく時間がなくて、夏休みに入る前々日くらいに小学校に全部ビラを配ってまいってくださいということで、1日前に夏休みに入った小学校には配れなかったというようなことがありました。あと町内会・自治会を使ってビラ配布をお願いしたりとか、短い時間でよくそこまでできたなっていうようなこともあります。

次回2月25日にもう1度、「誰でもスポーツ広場」を富士通スタジアム川崎で、障害がある方もない方もできるようなスポーツ、主に障害者の競技で使っているようなスポーツを中心に展開していきたいということではあります。

8月の参加人数ですけども、来場者がプログラムの配布数でしかちょっと測ってないんですけども約150名。これに大体家族で1部ずつ配布していることを考えると、300から400名くらいの方が来場したんだと思っています。次年度以降、川崎市の各スポーツセンターで1マスを使わせていただいて、そこの特徴があるところの競技をそれぞれ行っていくような計画を市と協議しているところではあります。以上です。

(福田市長)

はい、ありがとうございます。それでは続いて、3「かわさきインクルージョンモデルの実施」について菊池委員からお願いします。

(菊地委員)

はい。かわさきインクルージョンモデルでございます。これは前回もちょっとご説明を差し上げましたけれども、スポーツ庁からの委託事業でございます。川崎市さんからNPO法人高津総合型スポーツクラブSELFが受託して行っている事業でございます。

今年度は実行委員を中心に今日のような検討会を進めさせていただいて、分科会もやっております。かなりの回数を今年度はこなせました。そこから出たさまざまな委員の先生方のご意見を、われわれSELFとしてはSELFの活動場所と、あるいは指定管理で高津スポーツセンターをお預かりしておりますので、そういった場で具体的にいろんなことをトライしていこうじゃないかということで、中心的に「オープンエアプロジェクト」というプロジェクトを組みまして、障害者と健常者の子どもたちを中心に毎週土曜日の午前中、教室を行っております。それからSELF自体も1週間にバスケットボール・バレーボール・サッカー・野球等々53のプログラムがございますけれども、その中で16のプログラムについて、障害者の方が参加したいとご希望がある場合には、指導者がそれに対応して参加をさせていただきます。少しずつですけども障害を持った子どもたちの参加が増えてきて、毎週土曜日の午前中のダンスを中心としたオープンエアプログラム

には、大体毎回 30 名くらい、知的障害の子がほとんどですけれども、参加をいただいています。

須藤委員にも 1 度ご覧いただきましたけれども、大変盛り上がっているという状況でございます。われわれの役目としては、こういった場の提供を少しでも多くしていったって、通常のプログラムにどんどん障害のある子どもたちも入ってきてもらって一緒にできるような機会を増やしていこう、というのが大きな目的でございます。

横島委員にも参加していただいて、さまざまなご指導をいただいているところでございますけれども、一つの大きなイベントとして今年、つい先月 1 月 21 日に高津スポーツセンターで、「スポーツインクルージョン縁日」というイベントを開催いたしました。これは日本スポーツ振興センターさんのお声かけによって、川崎市と高津スポーツセンターということで、SELF が共催させていただいて、530 名くらいの方々に参加をいただきました。もちろん障害を持った子どもたち、大人の方も含めて、あるいはボランティアスタッフ、それから実際にボールゲームとか、そういったパラスポーツの指導者、障害者の指導者の方もグループでたくさん来ていただいて、指導側も子どもたちも一緒になって 1 日楽しいイベントができたと思っています。

お忙しい中、福田市長にもおいでいただいて、特にこの写真にございますけれども、実はこれ初めて体験したんですけど、卓球バレーという競技がございました。普通の卓球台を使うんですけども、ネットを挟んで、6 人卓球台を囲むんですね。で、ネットの下にこれくらいのスペースがあって、実はよく街にあるゲームセンターのエアホッケーというのがありますが、あんな雰囲気ゲームをするんですけども、これくらいの木のヘラを持って、中にちょっとウェイトがあって面白い動きをするピンポン玉をみんなでやり取りするんです。全くバレーボールと同じで 3 回で返す。ネットに当たったら 4 回返す。ボールがネットの上を飛んだり、お尻を椅子から離して打ったりしたら駄目ですね。ですから車いすの方、健常者の方は椅子に座りながら、この写真にもありますが、幼稚園児くらいから高齢の方々まで一緒になって、1 日常に満席の状態です空気がなくて、市長も体験できなかったですかね。初めて見たスポーツですが本当に楽しいスポーツで、こういったものをもっともっと我々も知って、提供していければと思った 1 日でした。

あと、先ほど須藤委員からお話にありました、超短時間雇用についてですが、ご紹介いただいております。お二人を面接させていただいて、SELF で今 1 日 2 時間ですけれどもいろんな仕事をしていただいております。うちは学校の中で部活が終わって夕方から今度はクラブの活動が始まるものから、その間の道具の整備ですとか、ビブスの洗濯ですとか、いろいろな仕事がたくさんあるんですけども、本当に笑顔で一生懸命やっております。たぶん続くだろうなと思っていて、続いていてもらいたいなというふうに思っております。いろいろお世話になってありがとうございます。以上でございます。

(福田市長)

ありがとうございます。続いて、6 番の「パラスポーツやってみるキャラバン」を北西委員、お願いします。

(北西委員)

私どもの方は市から委託を受けまして、小学校 13 校で「やってみるキャラバン」ということでやらせていただいております。その内訳ですけれども、車いすバスケットボールを 9 校、フライングディスクを 4 校実施いたしました。先ほど成田委員からもお話がありましたように、ほとんどの子どもたちは車いすというものに触ったこともないですし、もちろん乗ったこともないんですけども、やっぱりやってみるということが非常に素晴らしいことだというふうに感じました。まずバスケットボールをやるというよりも前に、選手の人たちが車いすバスケットボールというのはこういうものですよ、という説明と同時に、足が不自由になったという経緯を子どもたちに説明します。例えば仕事の中で脊髄を折ってしまったということですか、あるいは病気でこういうことになりました、そういう話をまずいたします。障害の程度も皆さんそれぞれ違う。ある方はもう胸から下は利かない。あるいは腰から下が利かない。病気でひざを手術して金具を入れているということで、普段は歩く分については杖をつけば歩けるけれども、スポーツをするためには車いすに乗らないとできません、というような説明をしていきますと、だんだんだんだん子どもたちは真剣に、そういう障害というものについて考えていきます。

まずは車いすに乗って前に進む練習をします。実際にやってみますと、前になかなか進まない。今、成田委員が乗っておられる車いすは普通の生活の時に使う車いすなんですけれども、競技用の車いすは車輪がハの字になっています。どうしてハの字になっているかというと、スピードが速いということ、片方で押すとぐるっとすぐに回転できるということ。それからもう一つは、後ろの下に補助輪が付いておりまして、後ろに絶対倒れないためにそういうものを付けていると。それからもう一つ、足の前にバンパーが付いていて、足が不自由になっている場合は、足に対して痛いとか熱いとか、そういう感覚が全くない場合も多いので、怪我がしないために必ずバンパーの中に足をその中に入れてやるというような説明を先にします。

後ろに行ったり、あるいは回転するというような体験をした上で、実際に今度はボールを持って、ちょっと小さいバスケットゴールに入れていくと。ほとんどの子どもは普通の体育館についているバスケットゴールですと届かないんですね。大人でもそのままやるとほとんど届きません。選手たちは、少し前に動きながらやると反動で届きますよ、というような指導をしていきます。子どもたちと選手が混じってミニゲームもやります。大体3分から5分くらいでやるんですけれども、子どもたちの声援はすごくて、そこで最高潮に達します。自分はやってなくても、選手と子どもたち、自分の同級生がやっているということになりますと、車いすバスケットボールという競技を自分でも体験したという感動というんですかね、そういうものが現れてきて、かなり盛り上がっていくというようなことを感じております。

最後に、選手の方たちに質問コーナーというのがあるんですけれども、「あと5分で終わりますので、皆さん選手のところに行って質問をしてください」となるのですが、なかなか終わらないんです。恐らく子どもたちが、選手が足が動かないというハンデを持っていたとしても、自分たちよりも上手にスポーツをやっているという感動を受けて、なかなか終わらないんですね。ある所では、選手たちにサインを求めて休み時間に食い込んでしまったということがありました。できれば来年以降もたくさん子どもたちにそういう経験をさせてあげたいな、と思っております。以上でございます。

(福田市長)

それでは4ページの3「アクセシブルシティかわさき」を、杉山委員と大塚委員にお願いできますでしょうか。

(杉山委員)

こんにちは。よろしくお願いいたします。私どもぐるなびは飲食店をネットワークさせていただいていますので、障害者の観点から飲食店の利用をしやすい状況を作っていくということと、もう1つ重要なのは、これは以前もお話したぐるなびのアンケートで言うと、飲食店が障害者の方を積極的に受け入れたいという回答が19%でした。受け入れたくないわけではなくて、さっき中森委員がおっしゃっていた、どうしたらいいかが分からないという方が結構高いのかなというのがデータでもありますので、飲食店側の意識も変えていくところをこの取組でやっていきたいというふうに思っております。

具体的には川崎市さんとアクセシブル・ナビさんとぐるなびの方で、まず調査する飲食店を川崎市内で20店舗選定をさせていただきました。大塚さんの方がそのあたりの調査をこれまでやってこられていますので、調査をいただいて、スケジュール的には4月中には第一弾の調査を終えて、どういう課題点とか、逆にどういう可能性があるかというところを整理したいというふうに思っています。6月までにはレポートしてきっちり整理をし、20店舗の実態を川崎市全体の飲食店に、あるいは障害者の方々が外食を楽しんでいただけるシーンを作っていこうという取組を今スタートさせていただいている、という形になります。

(大塚委員)

今、杉山委員の方からお話がありましたように、弊社がサービスの提供を行っております「アクセシブル・ナビ」というのがありまして。車いすのユーザーさんがより行きやすいところ、バリアフリーの整備が整っているところがどういうところなのかとか、「うちのお店ちょっと不完全かもしれないけれどウェルカムですよ」と言ってくれるお店を積極的に取り上げるということで、ぐるなびさんに20店舗をまずピックアップしていただいているような状況です。それを4

月から調査をかけさせていただくわけなんですけど、実は川崎市ともお話をしまして、3店舗ほどもうすでに取材をさせていただいて、まずはうちのアクセシブル・ナビの方に掲載をさせていただいております。その調査には私が行ったんですが、やはり今後の調査に関しましては、川崎市内在住の身障者の方に一緒に取材に取り組んでいただきたいということから、今募集を手前どもの方だけでかけまして、今4名の方が手を上げてくださってますので、この方と一緒に4月以降の調査をさせていただければというふうに思っております。この部分に関しては調査員を、今後どんどんどんどん拡充していきたい動きがありますので、その時には関係団体の皆さまにもちよっご協力をいただきながら、われわれの方からの呼びかけと、川崎市さんの方からの呼びかけ等々を含めまして、関係者をより多くして行って、こういった1つのムーブメントを起こしていきたいなというふうに思っています。

あとは事業者の方々が先ほど19%くらいしかなかなかポジティブにとらえていないというお話があったんですが、あくまでもこれは障害者のためとか、高齢者のためっていうマインドよりも、新たな客層の獲得というところのマインドを醸成してくところが非常に重要だと思いますので、その点も杉山委員と一緒に訴えかけて行って、拡充を図っていきたくて思っております。以上です。

(福田市長)

ありがとうございます。続いて4番、「宿泊施設等バリアフリー化促進」について中澤委員からよろしく願いいたします。

(中澤委員)

資料を見ていただくと全体が分かるわけですが、実はもともと東京都で私も関わっている宿泊施設のバリアフリー化の助成金の制度、東京で失敗している事例もあるので、川崎市のスタイルでぜひ川崎で成功してほしいということからこういう提案をしました。今年度はそれについて私も関わっている調査結果の検証をして、その結果をまた生かして、どうやったら川崎市にとって助成金を有効に使ってもらえるか、ということをはっきりさせたいという形で今進めています。

調査の結果としてはやっぱり予想どおり、川崎市内はビジネスホテルとか小さいホテルが多いので、ハード的には改修することが難しいところが多い。気持ちでやる部分もあるけども、それは続けるということはなかなかできないので、どうやったら改善ができるかというのは、これはもうすでに工夫してるホテルさんもあるんですけども、大半がまだできてないという状況なんです。もともと「バリアフリー」と聞いたら車いすってイメージがあるんですけど、実は宿泊施設も含めて情報障害とか、聞こえない人とか見えない人、こういう方々はいわゆる段差とかそういうものは関係ないんですね。逆にそれは人のサポートとかでも対応できる。じゃあ何をどういうふうにサポートすればいいのか、この辺の知識がないから、みんな腰が引けてしまっている。こういうところも、どういうふうに助成金制度もうまく使いながらノウハウを定着させるだとか、教育なんかにもうまく使っていくとか、今後いろんな形を目指して考えていく上で、今回の調査の結果を進めていくような感じです。

たまたま私の会社の方でも、日本サッカー協会といろいろと進めているので、その辺も川崎での取組をしっかり発信して全国に広げられたらと思っています。

(福田市長)

ありがとうございます。続いて5ページ目の4番、「インクルーシブなカワサキハロウィン」を土岐委員からお願いします。

(土岐委員)

チッタエンタテイメントの土岐でございます。カワサキハロウィンが昨年20周年を迎えたのを機に、何か新しいことにチャレンジ、取り組んでいこうという中で、目玉企画のハロウィンパレードというのがあって。これは駅前の大通りを約1.5キロ仮装して行進するというパレードなんですけれども、これを参加したい人誰もが参加できるハロウィンパレードにしよう。すぐできることではないので、できれば2020年とか、そこに向けて取り組もうと思っているんですけども、第1弾というか、まずはパレードに車いすの方も参加できるという環境づくりをやっ

みようということで、川崎市さんにいろいろ協力していただきながら、一緒に取り組みました。

なんで今まで参加できなかったかって言うと、やはり大変な人混みで、しかも大通りを車両規制するんですけども、車がいっぱい通る中で横断歩道を警察が信号操作しながら、「はい、皆さん一気に渡りますよ」みたいなことの繰り返しなので、仮装の中にいろんなルールを盛り込まざるを得ず、あまり大きな仮装は駄目ですよとか、車輪が付いている仮装は危険ですよとか、いろんなルールの中で、どうしても車いすの方は参加が難しいかなってということで、過去 19 年間は参加できなかったんですけども、今年はそういう環境づくりやろうということで、まず募集をしました。

ハロウィンパレードは2日間あって、最終日が大人のパレードで、これに3千人くらい参加して、観客が10万人くらい来ます。前日に未就学児、小学校未満のお子さんだけのパレードっていうのを小さな規模で行いますが、これは須藤委員にもお手伝いいただいたりして、大通りを通らないし安全だからということで、両日ともホームページで車いすの参加者を募集したんですけど、正直に申しましたら実は全然応募が来なかったんですね。大々的なPR、告知もしなかったんですけども、ただホームページの中に「車いすの方も参加できるのでお問い合わせください」みたいなことを少し入れたんですけど、もっと問い合わせとか来るかと思ったら意外と来なかった。これは次年度以降の課題かなと。そもそもそういうニーズがあったのか、なかったのかってこともあると思いますし、まず車いすの方が19年間参加できないというパレードだったので、もうハロウィンは関係ないというふうに思われていたのかなとか、いろんなことを考えました。

とはいえ、トライしてみようということになったので、川崎市さんなどにお手伝いいただいて、関係者とかいろんな組織に「こういうことやるんで参加したい方身近にいらっしやいませんか？」って言ったら結構手が上がってきて、最終的には大人の方のパレードに車いすの方5名、付き添いの方がその周りにそれぞれ2人ずつくらい付き添いでついていてくれたんで、合計15名くらい参加いただいて、その内の2名が障害のある方でした。

残りの3名は車いすのおばあちゃんでした。実はこれ、その企画を作った時に高齢者は想定してなかったんです。はなから発想がなかったのですが参加したいって言われてそれを拒む理由ももちろん全くなく、施設に実際に会いに行くと、現場の方といろいろ打ち合わせをすると、やっぱりそういうイベントに参加するのが生きがいというか、日々の刺激になってすごくいいんだ、みたいなことを言われて、「あ、そういうことでしたら参加してください」という感じで。一人につき二人ケアっていうルールだったのに、10人くらいケアの方がいらして、いろいろイレギュラーなこともあったんですけども、結果的に障害がある車いすのお二方もおばあちゃんも、ものすごく楽しかった。「思った以上にすごく幸せな体験でした」みたいなことを言っていたので、やったことは良かったんだなと思っています。

ただ、募集の仕方とかいろいろと反省しなくちゃいけない、改めなくちゃいけないこともいろいろあったなと思います。今年21回目になりますので、去年の経験を踏まえてより良いものにしていきたいと思っています。以上です。

(福田市長)

ありがとうございます。それぞれ素晴らしい取組をしていただいて、皆さんいろんなご質問だとかご意見などがあるかと思っています。土岐委員の話もそうですし、さっきの菊池委員の話もそうなんですけど、なんとなくパラメータメントという障害を持っている方だけというふうな感じに思われがちなんですけども、実際やってみるとほんとにインクルーシブな考え方ですよ。それに、私も日々発見ですけど、意外と想定してなかったけどそういうことだよってという発見、やってみるとありますよね。皆様いかがでしょう。

(山田委員)

須藤委員の就労体験に関連してですが、川崎商工会議所でも知的障害の方、身体障害の方についても就労支援を考えていますので、ぜひ連携してやりましょう。

(須藤委員)

ありがとうございます。この施策の入り口の頃から山田委員には大変応援していただいています。実情を申しますと、例えば菊池委員にも今大変お世話になっているんですけど、これやってみ

ようっていう窓口を1回与えていただけるかというのが非常に大きくて、この延べ4日間で10人の方が実はトライアルをしています。やってみただけちょっと落ち着かなくて続かないって、そういうことあるんですね。その中で2名の方が比較的継続して、週2時間というところに今至っていると。山田委員にお声がけいただいた企業の皆さんのところに市役所の皆さんと東大の先生と伺うのですが、やってみようという、この1回目のガードがなかなか堅いなというところも一方で実感がありますので、ご不安なお気持ちは十分理解できるのですが、実例も持ちよりながら、ぜひまた引き続きよろしくお願ひしたいと思ひます。

(小倉委員)

今の関係なんですけれども、市民活動センターでも、子ども文化センターで知的障害者の方の雇用をしています。フルタイムではないんですけれども。適材適所というものをどう見つけていくかっていうことが非常に大事で、やっぱりうちもトライアルでやって、続けられるかどうかを確認させていただいて、本人がやれるようであれば続ける。駄目だったらまた違う人でトライするというような形で今やらせていただひています。ただ、受け入れることに対して、見守る人が必要なんですよ。だから、そのために人員をプラスしないといけなひってひのが現状です。その辺がいわゆる健常者だったら仕事を「これやっけてください」って言ってやっけておけばいいってひということもありますけれども、そういう人がちゃんと対応できているか、どっか行ったりしてないかとかというのを見守る人が必要なので、その辺のことと両方足して雇用ということを考えていく方がいいなと思ひています。

(中澤委員)

今、福島県にあるJヴィレッジというサッカーのトレーニングセンターに関わっています。東日本大震災の関係で今まで使えなくなっていたんですよ。あそこでプレーをする選手たちのための施設なので、ホテルとかもいっぱいあるわけですね。ただ、年間通じて使われている期間が限られているんですね。そうすると、ビジネスにつながらないわけですね。維持するのが難しい。やっぱり今回はオリンピック・パラリンピックでプレーをする人たちにとっても、見に来る人たちにとっても、すべての人にとって使いやすい施設にすることで、観光施設にも使えるし、もっといろんな方に訪問してもらえる。そういうところに焦点を合わせています。今、それを全部見直すみたいなことをやっているんですけども、いろんな形の種目もいっぱいあるので、もっともっと幅広く考えてやっけていく。

ホテルなんかでも、例えば障害者の受け入れについても耳が聞こえない人、目が見えない人、いろいろな場合があっけて、なかなか従業員の受入態勢って一気にできないので、そこら辺もみんなのことを考えて、例えば聞こえない人のためには今もういろんなアプリができていますので、そういうアプリを使っけてコミュニケーションを完全にできて、お互い気兼ねなくできるようにしよう。

Jヴィレッジはサッカーフィールドが11面あるんですよ。敷地が広大なので、連絡をとるのもコミュニケーションのトレーニングということで、またいろんなシステムを投入してやっけていこうとか。今、この川崎のようにムーブメントが起きつつあるところもあるので、できたら川崎市で実験できないかなというか、体験できないかなと。ホテルさんも例えば車いすはちょっと厳しいけども、できる限り対応したい。でも、見えない人、聞こえない人だけではなくて、外国からのお客さま、多様な国のお客さま、この人たちに対してのコミュニケーションが一番大きいんですね。聞こえない人のためのアプリ、実は多言語化に対応できるのですが、日本語で調べれば英語で表示されたりというアプリが現にありまひす。

飲食でも、バリアフリーのイメージが車いすだけになっちゃっていると思ひますが、そういう多様性に対応するのにアプリ1台、これでも済むわけですね。あとやっぱり実体験ですよ。これでこんなことができちゃうんだという体験をしてもらおうとみんなおやりになるわけ。民間スタイルってひのはやっぱり商売にならないと、みんなずっと関わっけていけない。そういう意味ではそういうものをちゃんと見せながら、でもその基礎は市の方で応援していきっけていうことで、みんなが動きだす。そしたらあとみんな民間でやればいい。そんな形で全体的にはよいのではないかと思ひうんです。

それと、今、日本サッカー協会は全国のスタジアムとかを障害者差別解消法に合わせて、国の

建設基準、設計基準も発表されているので、それをパラリンピックのレベルの、IPC の基準に沿ったものをみんな見直していこうということに取り組んでいます。そのようなことも、この川崎市の中でもできるよ、というのをアピールすると、使う人にとってもいいかなと。そういうようなこと考えております。

(福田市長)

良い事例を見せていくということを積み重ねて、これができるんだからこれもできるはずですよ、というふうな話を展開していくということですよ。

(成田共同委員長)

先ほどの菊地委員の説明であった卓球バレーの点数って何点とかなんですか？

(菊地委員)

確かバレーボールと一緒に。なかなか試合が終らなくて、結構長いんですよ。皆さん並んでいただいたんですけど、残念ながら市長には…

(福田市長)

出番が回ってこなかった。でもほんとにあれば良かったですね。障害者の方だけじゃないんですよ。子どもからお年寄りまで全員参加ですから、いいコミュニケーションになっているんですよ。あの競技は素晴らしかったですね。

(菊地委員)

本当にそう思いました。閉会式やるよって言うても終わらない。極端に言うと1台でいいんですよ、椅子は普通の椅子で、こういう木のヘラを使って、ネットだけちょっと上げるんですけど、どこでもできるっていう感じで、外で風があってもできます。で、指導者の方が結構皆さん70代くらいの方々がごそっとチームで来てくれて、指導していただけます。「どこでも行きますから」っていう感じでおっしゃっていました。

(島委員)

中森顧問の方から、一過性に終わらないように、というお話があったと思いますが、活動が多分野に渡っているの、それぞれ単発、あるいは一過性、散発的なイメージになりがちだと思います。やはり全体としてのムーブメントを意識し表現していく必要があります、凝集力・求心力というものをどこかで持たせた方がいい。川崎市のムーブメントであるということ意識していただくような取組をやられた方がいいんじゃないかなと思いました。

それで、私はそもそもの市政の中で川崎市民のシティズンプライドを作るということがすごく重要なポイントだと思っております。そういうものの教育というのは子どもの時からと思っております。ですから、例えば子どもたちが、障害ある・なし全く関係なく、何か自分が関わったものについての蓄積ができるような仕組みを作る。例えば、最初は障害スポーツ推進組織の中で障害児、あるいは健常児として参加しました、その時に何でもいいんですね、丸でもスタンプでも、そういったものを1つのノートでもパソコンでもスマホでも何でもよいので、その中に記していく。例えば今日は障害スポーツをやる側として参加しましたが、須藤委員もおっしゃるように「観る・する・支える」と、参加の形はいろいろあるわけですね。お父さんと障害者スポーツを見に行きました。あるいは次にはそういうものを逆にやってみました。あるいは、支える側としてボランティアをちょっとやってみました。あるいは、バリアフリーと紹介されているレストランに行ってみました、あるいはそういう本を読んでみました。そういったものが自分の中で蓄積できて、それに対してやっぱり周囲が評価をしてあげられるようなことがあると、それがシティズンプライド、そういう市で育ったのだという子どもたちの自己達成感も含めたプライドにつながっていくのではないかと思います。

一番簡単な方法としては、例えばほんの小さなノートなどにパラムーブメントの中で関わっているイベントや場所に行った時にスタンプを押す、そんなことでも何でもいいんですね。IT教育をやっているような教育の現場で、パソコンや iPad など児童に何か持たせているのであれば、

そういうものに記録していく。パソコンや iPad に障がい者スポーツ関連情報を提供していく。今度はこういう大会やイベントがありますよ、という情報を貯めていって、川崎市にいるところないろんな体験もした、参加もしたことを記録していくのです。例えば支える側というのは、障害児が健常児に器具の使い方を教えることは、障害児が健常児を支えてあげたことになる。逆に障害児が何かやろうとした時に、健常児がそれを応援したら、それも支えたこと。お互いがインクルージョン、相互助け合いの気持ちを育組むことができると思いますので、そういう仕掛けをぜひ作っていただき、蓄積・凝縮できるようにしていかなないと散発的になってしまう場合もある。

川崎市の中で、それがぐっとコアの部分で育っていくような仕組みがあるといいかなと思います。特に子どもたちを対象に何か考えていただければ、川崎市の子どもは他の自治体へ行って、「うちの市ではこういうことやっているのだけど、君たちの市にはないのか」とか、「一緒にやろうよ」とか、そういう親善大使みたいなのも育っていくのではないかなと思います。市長にもぜひ考えていただければと思います。

(福田市長)

ありがとうございます。とっても大切な視点で、参加すると、認証じゃないですけど誰かに認められる、プライドになる、だからまた参加する、というグッドサイクルを回していくための仕掛けって、たぶんものすごく大切なことなので。いや、これはぜひ何らかの仕掛けを考えようと思うんですけど、このような島委員のすてきなご提案について何かご意見ございませんか？

(大塚委員)

私は栃木県の宇都宮市が地元でそこで活動しているのですが、評価というか、スタンプリー的なものとはちょっと違うんですけども、似たようなものだと、子どもたちに成果物を残してあげることがやったという証明になって、それこそ1年後、2年後とかでも、「いや、2年前に実はこういうことに関わったんだよね」ということを、他校から来た子どもたちと話し合ったりして、その情報を共有することで子どもたちの障害に対してとか、ご高齢の方に対しての気持ちが醸成されてくんだと思うんですね。

実際ちょっと手前どもの方でやらせていただいたのが、宇都宮は餃子が大変有名ですので、餃子祭りに合わせて私の地元の小学生105名に出してもらって、街中で餃子祭りというのが行われるんですが、多目的トイレがどこにあるかっていうのを13ブロックに分けて、全員に調査に行ってもらったんですね。それで調査してきた結果を一つのマップにして、それを餃子祭りの当日に配る。プラス、市と県の方に千部ずつ寄贈するというのをプロジェクトでやらせていただいたんですが。その時は子どもたちが自分たちが調べたものがこうやって紙ベースになったということがすごく身になって、学びになったわけですね。しっかりと落とし込まれたというふうなところがあって。なおかつそれが新聞に出て、地元のテレビ局に放送されて、「誰々ちゃんがインタビューを受けた」とか、そういったものが全体的な形で浸透してくことがつかめたんですね。その時にはありがたいことに、ある企業様にスポンサーしていただいたんで、そのマップを作る礎石などもまかなえたということがありました。

例えば川崎市さんで何かそういったことに取り組まれるのであれば、市内の企業様などを絡めて、例えば子どもたちのサポートをしたというようなことで、その会社の中で支援だけで終わらせないで、主体的にポジティブに取り組んでくってということをやってくると面白いのかな、と感じました。

(成田共同委員長)

私は川崎市下作延小学校の4年生に毎年講演に行っているんですけど、その4年生の子どもたちが溝の口周辺の多目的トイレがどうなっているのかというのを調べて、一枚の紙にまとめて、それを高津区役所とか丸井とか横浜銀行とかに置かせてもらっているという事例はあります。子どもたちもすごく注目してトイレを見直してくれて、車いすじゃない人が入ったらどうするかとか、そういうことまでも考えてくれています。4年生って福祉の授業で、障害者について勉強する機会が1年間あるので、その中で取り組んでくれたんですけど、とてもうれしかったです。「成田さん、見てください」とって、その紙をもらいました。

(福田市長)

仕組みづくりについて私の方としても考えたいと思いますし、いつものことですが、いろいろなアイデアについて、メール等でも随時いただければ大変ありがたく思います。いろいろご意見もあると思うんですけども、まだ資料1ですので、その他の取組について事務局からいくつかまとめて簡潔にご報告させていただきたいと思います。

(山本オリンピック・パラリンピック推進室担当課長)

それではいくつか絞り込みたいと思いますので、2ページの方にお戻りください。ひとつづくりの分野における具体的な取組状況の5番でございますが、「障害者によるアートデザイン活用(名刺の作成)の取組支援」でございます。こちらは幸区でございます障害者通所施設と、障害者アーティストの4名の方のコラボレーションによるものでございまして、昨年8月にアートデザイン名刺の作成に取り組んでおります。

続きまして、4ページをご覧ください。まちづくりの2番目でございますが、「スポーツ施設におけるバリアフリーの推進」ということで、平成27年度までに実施しました、市内スポーツセンターの現地調査に基づいて、今年度から3ヶ年で優先度の高い施設や項目についてのバリアフリー化を進めております。

続きまして、5ページをご覧ください。5ページ、都市の魅力向上の3、「文化施設やイベント等でのバリアフリープログラムの充実」ということで、こちらにつきましては文化施設でのイベント等における障害のある人や高齢者も参加しやすいバリアフリープログラムの拡充が、特にブリティッシュ・カウンシルとの連携により、昨年10月17日に市文化施設担当者を対象に英国の芸術監督ジェニー・シーレイ氏との意見交換会なども実施している、というような実績がございます。簡単ですが、川崎市の取組をご報告させていただきました。

(福田市長)

この取組について何か御意見ございますか。よろしいでしょうか。

それでは、次第の2、昨年12月1日に開催いたしました、パラムーブメントのシンポジウムについて報告をさせていただきたいと思います。当日、中森委員に基調講演をいただいて、それから成田共同委員長と、それから山口選手、私もパネリストとして参加させていただき、多くの方にご参加をいただいたと思っています。先ほどもちょっとお話しいたしましたが、付け加える点ありましたらご報告いただきたいのですが、まずアンケート調査について事務局から報告をさせていただきたいと思います。

(山本オリンピック・パラリンピック推進室担当課長)

それでは、資料2をご覧ください。アンケート結果でございますが、こちらにつきましては当日230名の参加者の内、アンケート回収数が123通ございました。「本日はどのプログラムを目的に来場されましたか？」につきましては、「パネルディスカッション」が105ということで、その次に「基調講演」、「市民特別賞の贈呈式」というような順になってございます。

2番の「かわさきパラムーブメントについてご存知でしたか？」につきましては、「知っていた」が78となっております。

続いて3-1「基調講演についての感想」でございますが、こちらが「大変参考になった」「ある程度参考になった」が125となっております。

裏面の3-2でございますが、「パネルディスカッション かわさきパラムーブメントについての感想」で、こちらは「大変参考になった」と「ある程度参考になった」が合わせまして118となっております。

3-3「パネルディスカッション パラリンピアンへの報告についての感想」、こちらにつきましても、「大変参考になった」と「ある程度参考になった」が188でございます。

また、3-4の「パネルディスカッション 意見交換についての感想」につきましても、「大変参考になった」「ある程度参考になった」という方が120といった状況でございます。

右側4の「このシンポジウムに参加してかわさきパラムーブメントに対する理解や関心が深まったと思いますか？」という問いにつきましては、「そう思う」とのお答えが115ございました。

また、5番の「2020年の東京オリンピック・パラリンピック競技大会に向けて、どのようなこ

とにご関心がありますか？」という質問に対しましては、「障害者スポーツの環境や機械の充実について」が 79 ということで、次にその下の「スポーツをする・観る・支える環境の充実について」、こちらが 72。3 番目が 1 番上の「川崎にゆかりのあるアスリートの活躍について」が 48 ということでした。

続きまして、6 番目につきましては、中森顧問からありましたけれども、大体アンケート 123 通の内、半分の方が市外からお見えになられた方でございます。

最後になりますが、その他自由記入といたしまして、全体の感想でございますが、「できることからやっていきたい。まずは行動すること。」や、「生の意見が聞けて大変勉強になった。」という意見がございました。次に、「かわさきパラムーブメントについて」の部分でございますが、こちらは「会社のイベントなどでぜひ考え方を取り入れていきたい。」といったようなご意見もございました。裏面にまいりまして、「障害者のスポーツ施設や用具について」ということで、こちらについても 1 つ目のところにつきましては、「成田さん、山口さんの体験談が非常に興味深かった。」というようなご意見や、一番下の、事務局が大いに反省するところでございますが、「中森事務局長の講演時間が短かった。」というような御意見もございました。多数意見をいただいておりますが、後ほどご参照いただければと思います。

(福田市長)

たいていは講演が長すぎたというクレームがあるんですが、短かったと。大変ありがたい。

(中森顧問)

結構早口でしゃべったから、そう感じたんじゃないですか。内容は結構盛り込んでいたんですけど。

(福田市長)

中森委員、成田委員、お二人から先ほどにプラスアルファで何かございましたらお願いします。

(中森顧問)

先ほどのところの、4 ページの杉山委員のアクセシビリティかわさきのところですが、補助犬のことをちょっと頭に入れてほしいなど。盲導犬をどうするかとか、法律上は断れないんですね、でもそれを知らない人がたくさんいるというのが現実ということと、公共施設で大きいものを作る時にはそういう補助犬の方のトイレをちょっと頭に入れて、スペースがあるといいなど。沖縄の空港はあるみたいなんですが、補助犬のトイレがあるとところってそんなにないんですよ。もう一つは、宿泊施設のところなのですが、川崎に例えば車いすの人が 30 人まとまって泊まれるホテルってあるんですか？

(福田市長)

ないです。

(中森顧問)

じゃあ東京にはありましたか？

(中澤委員)

それは世界中でもなかなかないと思いますね。

(中森顧問)

例えば 1 泊 3 万、4 万円のホテルじゃそれは大丈夫だと思うんだけど、1 万円から 1 万円少しのところでのそのような部屋がないと、障害者のスポーツのイベントができないんですよ。例えばボッチャの大会やるとすると、全国から選手が集まってきます。じゃあどこに泊まるかっていうと東京のあちこちに泊まる。やっぱりある特定の 3 つ、4 つのホテルでみんな泊まって交流するっていうのがいいのかなということ。だから、再開発の中でホテルを作る時はぜひそういう発想でいいかなと。

先ほど出てきたJヴィレッジの話ですけども、実はヨーロッパではああいうナショナルトレーニングセンターのようなところを作ると、そこはホテルなんですよ。だからホテルに泊まる。さらにホテルに泊まる人は、選手強化に専念している人じゃなくて、お客さんなんですよ。お客さんが来るということと、お客さんがたくさん集まってできるコンベンションホールも合わせて持つてる。堺のJヴィレッジも、たぶん福島のJヴィレッジも、そういう考えはなかったんですよ？

(中澤委員)

今はそういうふうにあります。

(中森顧問)

変わってきている？

(中澤委員)

はい。

(中森顧問)

素晴らしいなと思います。

(中澤委員)

ホテルはなんかもう一軒作るらしいです。現在のホテルについても実は部屋のことについても全然考えられてなかったんですよ。パラの選手が集まるとか考えてない。スタジアムや、いろいろ施設があるんですけど、例えば着替える場所、バックヤード、これも全然入ることを考えてないから、もう階段だらけです。だからそういうスタジアムも全部みんな併せてやっています。それを、サッカー協会の管轄全部でやろうということ、現在パラのサッカー7 団体がサッカー協会の傘下に全部一緒になっています。

(中森顧問)

日本サッカー協会がリーダーシップを持って、障害者のサッカー団体は7つあるんですね。電動車いすサッカーもあるし、あと聴覚とか知的障害、CPとか。その7つをサッカー協会がリーダーシップを持って集めてくれて、そこを1つの団体として、その活動をサッカー協会が応援しよう。で、北澤豪さんが会長になってくれているんです。

あと堺のJヴィレッジで、去年の2月だったかな、精神障害者のサッカーの国際大会をやったんですよ。南米とイタリアの2ヶ国と日本でしたっけね。そういう大会も始まったということです。

(中澤委員)

千葉県にもできるナショナルトレーニングセンター、そっちも一緒に最近見直すことになったんです。たぶんきっと変わってくると思います。

(中森顧問)

最後に、5 ページのインクルーシブなカワサキハロウィンについて、日本で一番有名なイベントと認識したんですけど、障害者スポーツをやっていて一番大事なのはやっぱり仲間づくりかなというふうに思いました。障害になって浅い人が障害者スポーツチームに入るとどうしたらいいかわからない。こんな状況の中で、仲間がいるとそれを教えてくれる。スポーツをしながらどんどん経験積んでいって、前向きに生きていける。しかもスポーツをすることで体も元気になっていく。スポーツが上達すれば目標が出てくる。目標が出てくると、それを達成するためにいろんな課題が出て、それを乗り越えていく。

スポーツの良さっていうのは、達成感の連続なんですよ。やり始めたころは、できることできることがいっぱいあるわけです。でも、パラリンピックとかオリンピックの頂点になってきたら、そう簡単には乗り越えられない。簡単に乗り越えたら世界一になっちゃうんで。始めのうち

はどんどんどんどんいくわけですね。達成感、成功体験の連続がスポーツの世界にはある。障害者のスポーツが発展した理由がそこにあるのかなど。しかも仲間で。さっき話が出た卓球バレーも3対3でやるから、やっている人が盛り上がる。それはなんでかという、仲間と一緒にやっているから。三人でやって勝敗を決める。その中で楽しみながら、しかもコミュニケーションが広がって、相手の理解が深まる。これはチームスポーツの良さです。だからこの仲間づくりで言うと、ハロウィンも聞いていてぜひ対抗戦、コンテストにしてもらったらどうかなって。

ここで言うと例えば、自治会対抗のコンテストと、子どもたちのコンテストをグループでやりますよと。参加する人はそこに参加しましょう。審査員が見て、優劣を決める、1番を決める。そうすると、そこに参加する人たちはやっぱり仲間づくりが進むわけですね。僕は今、日本に足らんのはやっぱり自治会。近隣のつながりがないから、自治会対抗が一番かなって思って。で、参加してくれて、みんなでハロウィンのどういう衣装で、どういう演出で参加しようかっていうことをやっていく。これが広がってくと、どんどんどんどん活性化してくかなと思って。そこには、要は外国の人も含めて、特にインクルーシブの中で障害者っていうのがすごく強いんですけども、やっぱり少数の外国人の人たちっていうのはちょっとはじかれてるような気がして。そういう人たちも含めて、グループ対抗戦というのでもいいんだけど、そうやるともっと盛り上がるっていうことと、人間の関係が密になる取組も含まれてるから、ぜひなんかやってほしいなって聞いていて思いました。

(土岐委員)

ありがとうございます。今年実現させたいと思います。

(福田市長)

だいぶ時間が押してまいりましたので、成田委員、何かお話ししたいことありますか。

(成田共同委員長)

この間の時お話をさせていただいたんですけど、車いすユーザーだったら気付いていることだと思うんですけど、車いすとベビーカーのスペースが、各鉄道会社の車両によって違うんです。小田急線は前と後ろ。南武線は後ろから2番目の車両とか。私かなり昔にNHKの「ようこそ先輩 課外授業」っていうのに出たんですけど、その時に子どもたちにやはり車いすに乗ってもらう体験をしたんですね。最初は子どもは「うわ、面白い」「楽しい」ってなってたんですけど、雨降った翌日だったので、「校庭に出てきて」って言ったらもうぬかるんで一歩も動けなくなったんですね。その時に私は言ったのは、「楽しいんじゃないんだよ」って。スポーツは楽しいかもしれないけど、車いすで生活をしているっていうことは、これがずっと一生続くんだよって。みんなは今楽しいって言ったけど、楽しくはないよね。大変なんだよ。っていうことなので、スポーツは楽しいって受け止められていいと思うんですけど、車いすに乗っていると大変だとか苦労することもあるから、じゃあ自分たちが何をできるかっていうふうに子ども自身に考えてもらえるような感じが必要なかなって。ただ乗ってもらって「わーっ」っていうんじゃないかって、そこで子どもたちなりに考えてもらうことが必要になってくるんじゃないかなっていうことを感じました。

(須藤委員)

一つ伺っていいですか？今のご指摘の、車いすに乗ることが楽しいってことよりもむしろ大変なんだっていう意識の教育っていうのは、私も54のおじさんなんですけれども、私が子どものころから今日までむしろなされているんじゃないかというふうに思うふしもあるんですね。それが必ずしもかわいそうなことではなくて、あえて車いすに乗れるっていう境遇は、ある意味かっこいい部分もあえてあるんだと、そういう意識がある程度これから未来に向けて必要になってくるんじゃないかなとも考えるんですけれども、その辺はいかがですか？

(成田共同委員長)

そうですね。私も派手な車いすに乗っていて、子どもたちがかっこいいと言ってくれるのは大変うれしいんですが、私も最初からこういう派手な思い通りの車いすに乗っていたわけではないんです。また私の車いすを見て、大勢の方が“わあ！”と喜んでくださるということは、まだこ

ういう車いすが一般的ではないということです。私にとって車いすは“足”ですけど、その重量に慣れて、操作を簡単そうに見えるまで訓練するのは、本当に大変です。健常者の方でもこぼこ道、ぬかるみ、段差など歩きづらと思います、そこを車いすで通るのは本当に大変なんです。また道だけではなくて、駐車場に車を止めるのも、車いす用のトイレを探すのも、とにかくまだ苦勞することがたくさんあります。

なので、例えば、「車いすってどういう人が乗ってるの？これは何？」から始まって、「階段はのぼれるの？」「どう思う？」みたいな、そうやりとりも大切だと思います。障害者が日々感じている大変さも知っていただいた上で、かつこ良さもアピールしたい、あらゆる角度から子どもたちには理解してもらいたいと思っています。そういうことにつながっていけばベストなのかなと思います。

(中澤委員)

私もいろいろな会社で研修をやるんですけども、例えば高齢者体験キットって、目が見えない体験をやりますけども、その時だけじゃないんですね。24時間365日そうなんですよ。それがどういうことかっていうこともやっぱ分からないと、日本の場合は子どもの時から一緒に体験するというか、味わう機会がなかなかない。

(須藤委員)

学校もそうですね。

(中澤委員)

同じ世代だからたぶん僕らにとってそうだと思うんです。だから、これから日本もインクルーシブになっていくんだらうけども、今の段階ではやっぱり大人も含めて協力を進めていかないと、楽しいことと併せて知ってもらう。そのことが一番ポイントだと思います。

(福田市長)

ありがとうございます。

それでは次第3で、「29年度のかわさきパラムーブメントに関する取組の方向性」について、資料3をご覧くださいと思います。2月の6日に来年度の予算発表をしたんですが、来年度についてもかわさきパラムーブメントというのをさらに力を入れていく予定でありますので、この予算案の資料を活用して、来年度の方向性についてご説明をさせていただきたいと思います。事務局からお願いします。

(山本オリンピック・パラリンピック推進室担当課長)

それではご説明いたします。資料3をご覧ください。こちらにございます「平成29年度予算案におけるかわさきパラムーブメントの主な取組」といたしまして、まず予算案の額でございますが、前年度に比しまして980万9千円増の5980万9千円というような数字で、ここに掲げております5つの柱に沿って取組を進めていくこととしております。市民文化局におきましては、スポーツ、それから文化をそれぞれ事業所管しております、その黄色の枠囲いの中にございますように、「障害者スポーツの体験による障害者スポーツの普及促進の拡充事業」ですとか、あるいは「誰もが暮らしやすいまちづくりに向けた文化芸術に親しめる環境づくり（パラアート推進事業）の取組」といったものにつきましては、別立てで事業所管の方に予算を計上しておりますことから、こういった見せ方となっております。

右側の取組の具体的な内容でございますが、「かわさきパラムーブメント推進ビジョンに基づいた取組の拡充」ということで、具体的なものといたしましては、市内小中学校における障害者スポーツ体験講座の拡充。オリンピック・パラリンピックの派遣の新規の実施。小杉駅、川崎駅周辺のバリアフリー調査の実施及びバリアフリーに関する情報発信のあり方検討。こちらが新規。市内宿泊施設や飲食店のバリアフリー化促進に向けた検討が継続。アール・ブリュット支援の取組が新規となっております。

2つ目といたしまして、「かわさきパラムーブメントの理念の浸透に向けたプロモーション活動」に力を入れていくということで、こちらにつきましては今年度かわさきパラムーブメントの

ホームページを特設サイトという形で情報発信いたしますが、今後さらに広報用映像等の活用を通じて、パラムーブメント推進ビジョンの取組期間である 2021 年度までの戦略的な広報に段階的に取り組むための予算を確保したものでございます。

「第 2 期かわさきパラムーブメント推進ビジョンの策定」につきましては、数値目標の設定によるレガシーの形成や見える化、パラムーブメント推進フォーラムの開催、パブリックコメント手続などを通じた意見を参考としながら、平成 30 年度からの第 2 期推進ビジョンの策定に向けた作業のための予算を継続しております。

4 つ目が、「JOC と連携した取組」として、JOC との共催による「スポーツと環境・地域セミナー」。これは昨年度東京で開催されておりますが、29 年度については川崎市開催となっております。また、市内の中学校におけるオリンピック教室につきましても、昨年度柿生中学校で開催しておりますが、29 年度につきましてはおおむね 2 校ほどを対象として、引き続き開催していきたいというふうに考えております。

また、次の「ホストタウンの取組の推進」ですが、こちらにつきましてはブリティッシュ・カウンシルや英国大使館など英国関係機関と連携した取組を実施するという事としております。

続きまして、枠囲いの中でございますが、「障害者スポーツの普及促進に向けた取組」として、具体的な取組内容でございますが、各区スポーツセンターにおける「障害者スポーツデー」の開始。これは新規でございます。障害者スポーツの備品、競技用の車いすの購入などが新規となっております。また、本市スポーツ事業の一元化ということで、障害者スポーツ関連事業を今年度健康福祉局にございましたものを、29 年度からは市民文化局へ業務移管をする予定となっております。

2 つ目のパラアートの推進でございますが、障害のある方もない方も一緒に文化芸術活動に携われる環境づくり、観賞できる環境づくりを進めるとともに、東京大会に向けた文化プログラムを展開するとしておりまして、具体的には障害者等の文化芸術活動を促進する環境や体制（パラアート・プラットフォーム）を構築するための準備会議の開催、展覧会等のモデル事業の実施を新規で掲げております。

予算につきましては、左の方でございますように、障害者スポーツ関連が 1,248 万 1 千円。文化芸術に関しましては、784 万 3 千円を予算案として計上させていただいているものでございます。説明は以上でございます。

（中森顧問）

障害者スポーツの備品の購入の件なんですけども、われわれ日本障害者スポーツ協会は、NHK のチャリティーで毎年 700 万円くらいいただいているんですね。そのお金を何に使っているかというと、この障害者スポーツの用具の購入に使っています。県のスポーツ協会から要望を受けて出しています。川崎市はできたばかりだからたぶんまだないんじゃないでしょうか。

（横島委員）

ないです。

（中森顧問）

そんな話もたぶんご存知ないと思うんですけど、たぶん継続されれば 100 万円の物はうまくいけばできます、というのが一つ。もう一点、パラアート・プラットホームについてですが、パラリンピックサポートセンターが障害がある人のアーティスト情報を持っているので、障害がある人でダンスができるとか、楽器が弾けるとか、あとデザインをされるとか、そこで聞くと結構いらっしやるかも分かんないですよ。僕も三人ほどそこ紹介しましたので。

（福田市長）

昨年の会議で北條委員からもパラアートについてのご提案などもいただいております。何かコメントがございますか。

（北條委員）

やはりアートについても実演者っていうんですかね、音楽にしろ、演劇にしろ、自分で実際に

やってみいたいという人。それから、その人たちがやるのにやはり送る人といえますか、企画をしてどういうところでやるんだということ。それからもう一つが、観賞といえますか、支えるという。この3つが繋がってこないとなかなか一つの事業になっていかないと思っています。

川崎市内においては、ずっともう20年以上言語で第九を歌うということをやっています。作業所の人がいったり、いろんな方がやっているし、それを指導する方も大勢の方がいますけれども、ほとんどが個々で動いていることが多いです。先ほど言った映画もアートセンターでやっていますし、いろんなことをやっていますけれども、個々の物を少しみんなで集まって緩やかな協議の中でお互いが情報交換する。それで、こういう指導者が足りないとか、ダンスを踊ってるけどもう少しグループを増やしたいとか、いろんなところでやってるけどなかなかチケットがさばけないとか、連携する中で、それぞれの活動がより活発になっていけばいいだろうと。上から、「こういうのを皆さん集まってやりなさい」とか、「ダンスやりなさい」と言うよりは、個々のところで動いている人が大勢いますので、それをやっていくということが非常に重要じゃないかというふうに私は思っています。

パラリンピックのサポートセンターがあるということで、そういうところに入ってる人もいらっしゃるし、中にはもうはっきり目的持ってダンスでパラリンピックの開会式に出たい、という先生もいます。そういう大きな目標から、この前の不幸な事件があった相模原への想いで、初めてダンス教室を開いて、みんながあ的事件以来初めて喜んだという、そういう記事が大きく出ていましたけれども、それが川崎の方なんです。そのダンスを指導してる人もプロのダンサーなんです。川崎市内にいろんな方がいらっしゃいますので、それらを緩やかに連携する中で一つの大きな目標を。それから当然障害者以外の方々も、高齢者の方、どちらかというところもいろいろいろんな意味では高齢者の方に視点を当てているグループも多いです。ですから、その辺が一緒になっていければというふうに今思っていますので、よろしくお願ひしたいと思います。

(福田市長)

今、北條委員がおっしゃったように、やっぱりさまざまな活動をやられている方が現時点でいるんだけど、おっしゃるように個々で取り組まれているっていうことが多いと。だからそこを緩やかに連携していくっていう取組って非常に大事だと思いますので、ぜひこの体制作りをしていきたいというふうに思っております。

(中森顧問)

資料の下にある具体的な取組について、各区スポーツセンターにおける「障害者スポーツデー」の開始っていうのがあります。やっぱりスポーツはまずきっかけがあって、次に日常化というか、週に1回、2週間に1回、日常的・継続的にスポーツをやる。その先にパラオリンピックを目指すとか、競技スポーツに行くんですけども、ぜひ日常化に力を入れる形でやってほしいなど。

ここで言うと、スポーツデーっていうのは月に1回なのかな？それとももうちょっと少ないのか、というのがちょっと気になって。ほんとは毎週この曜日のこの時間は障害者の人が優先的に利用できます、さらに、そこにインストラクターが一人二人いて、何か悩み事があったらちゃんとサポートしますって、いうふうにすると、日常化が始まれば、あと早いんですよね。スポーツが好きになったら、じゃあ自分で場所探して自分でやるようになるんですよ。でも、きっかけがあって日常化が進むまでは、やっぱりサポートというか、そういう場所を設定してあげないといけない。障害者ってたぶんそういうところがありまして、慣れてくるといろいろ人のつながりもできて、情報も入ってきて、今度は自ら一人でやりましょうってなります。だからぜひ、ここは週に1回継続的にできるようになればいいかなと思います。

(横島委員)

その事業を実施する側なんですけれど、今のところ年1回、各スポーツセンターで順繰りにやっていくんで、7区ありますから、新しいスポーツ文化施設もできますけど、そういうところでやってみようというきっかけをまず来年度実施して、それから継続性が生まれてくると思うんですね。で、今回11月に障害者スポーツ指導者の初級研修があったんですけども、そこには各区のスポーツセンターの職員の方に参加していただきました。障害者の方が利用するっていうことはどういうことなんだっていうところが、まだスポーツセンターの中でも分かっていたいて

ないところがあって。障害者の方がスポーツをするということに、どう対応していいか分からないっていうところがあったみたいなんですね。ですから、順番に段階を追って実施していきたいと思います。

(中森顧問)

川崎市にはわれわれの協会の公認の指導者が何人くらいいらっしゃいますか？100 人はいるんでしょう？

(北西委員)

ちょっと正確な数字は今、把握していませんが、

(中森顧問)

100 人以上いらっしゃると思うので、そういう人たちの協力を得てやれば、少なくとも「知らない」とは言わないと思います。あとは、横浜ラポールであったり、東京障害者スポーツセンターであったり、障害者のスポーツセンターからこの事業に一人アドバイザーを頼むとかね。障害者スポーツセンターの職員は障害ある人にスポーツ支援するのを毎日やっているわけですよ。だからちょっと中堅の職員に来てもらって、ここに入ってもらえば安心してできると思います。障害もいろんな種類があって、程度もあって、例えば、内部障害で心臓の悪い心臓障害の人は運動強度とか、運動の時間とかやっぱり制限がある。あとは視覚障害の中で全盲とか弱視の方が中には眼圧が高くて、頭にぼーんと当たるだけで眼球が破裂するとか、いろいろ危険なところがあるんですね。障害者スポーツセンターは、基本的にはちゃんと分かってるから、参加する障害のある人の障害の種類と程度とか見れば、たぶん想像つくと思います。

(山田委員)

時間がないようなので、短く申し上げます。障害者スポーツの備品、車いすの等の購入は大変重要だと思います。パラムーブメントですから、新規予算も重要です。市内の子どもたち、小中高生等、対象人数がどれくらいおられるか、検討いただきたいと思います。足りないとすれば、横島委員が所属されている川崎市身体障害者協会は公益財団法人ですので、協会ですら市内産業経済界に寄付を募るといふことも、方法として考えられると思います。経済界として応援したいと思っています。予算が足りないのか、足りるのか、検討が大事だなと思います。

(瀬戸山委員)

質問です。東京オリンピック・パラリンピックに参加しそうなアスリートの方で川崎の方は誰か候補っていらっしゃるんですか？

(北西委員)

実際にいらっしゃるかどうかはちょっとわかりません。

(瀬戸山委員)

パラリンピック・オリンピックが実際開催されるにあたって、やはりアスリートの方がもしいらっしゃるのであれば、育成とか支援した方がいいんじゃないかなと思います。

(中森顧問)

われわれ JPC は、競技団体の評価に対して国からのお金で強化費を助成してるんですね。

(瀬戸山委員)

それは分かります。

(中森顧問)

われわれがやっているのは、競技団体から強化計画をまずいただいて、この強化計画に参加する選手は誰ですかと。で、それをサポートするのは誰ですか、スタッフは誰ですか、これももら

うんです。もらった時に、川崎市の在住の人のリストはお渡ししていると思います。

(瀬戸山委員)

もちろんそれはよく分かりますし、それはJOCでも全部同じだと思うんですけども、各地域で、候補に競技団体から名前が上がる前の子をサポート育成することで、その舞台に立てるようになると思うので、もしそういう候補の選手がいるのであれば、その育成支援をしっかりとすべきじゃないのかなと思います。

(中森顧問)

それには1つクラス分けという大きな課題があるんですね。例えば成田さんがパラリンピックに参加する一番初めの時点で、まず競技団体の10の候補選手に挙げられます。で、強化練習とかなんかいろいろやって、初めて国際大会に行った時に、クラス分けテストを受けるんですね。この成田さんは当時はSの4つという確定をされます。これがないと、これが世界レベルかどうかははっきりしないわけなんですよ。

(瀬戸山委員)

それはよく分かるんですけど、その舞台のちょっと手前で、各地域で例えばパラリンピックじゃなく普通のオリンピックでも、各地域でオリンピックを育てようってプロジェクトっていろんなところでされてるじゃないですか。それがパラリンピアンの方でも一生懸命やりたい、やらせたいっていう方がもし川崎市にいらっしゃったら、そういった方のサポートがあってもいいのかなと思ったんです。

(唐仁原市民文化局長)

28年度からになりますけれど、川崎市スポーツ協会を通じてになりますけど、ジュニアアスリートの支援、20年に届くかどうかはまた別として、若い選手たちの育成っていうことに取り組み始めたばかりです。川崎市スポーツ協会のネットワークを通じて、この子が優秀だよっていう時に、少しずつ財政的な支援ではあるんですけども、そんな取組を始めています。

(瀬戸山委員)

ただそこに障害者スポーツの方も入ってらっしゃる？

(北西委員)

今、加盟団体に対して、東京オリンピック・パラリンピックに向けて、今おっしゃいましたように、現在ですごい成績を残している方ではなくて、ジュニアの方たちでそういう可能性のある方がいらっしゃったら、こちらの方で市からの補助がありますのでご推薦くださいってことをやっております。

(成田共同委員長)

実際問題、私たち水泳の場合は、強化選手と育成があって、育成は22歳以下なんですね。で、私は強化に入ってるんですけど、強化S、A、B、育成S、A、Bで、育成の選手だけで30人くらいいるんですよ。その中に川崎の子は二人入っているんですけど、彼たちに言わせれば泳げるプールが欲しい。そういうことなんです。

(瀬戸山委員)

スポーツでレガシーって話になると思うんですけども、そういった子を育成するっていう仕組みを作るのがレガシーのひとつかなというふうには思います。

(中澤委員)

そうですね。やっぱり予算の話もそうなんですけど、海外ではもうずっと前にオリンピック・パラリンピックが一緒になっているんですよ。たしかシドニーくらいからだったと思うんですけど。そういう段階になったのは日本はついこの間ですよ。だから全然まだスタートラインに立ったと

ころだと思います。

(瀬戸山委員)

アスリートの方はモチベーションが上がるのかなあというふうに思います。

(中森顧問)

12月のシンポジウムの基調講演で少しお話したことなんですけども、障害がある人たちのスポーツの環境で、先ほど言ったきっかけのところと、日常化のところと、毎日練習する強化のところ、これがオリンピックと比べて非常に環境が悪いわけですね。きっかけも少ないし、日常化もない。どこか川崎市内でスポーツ教室とか、同好会が週に1回練習してるようなグループってあるのかっていうと、ここくらいしかないわけで、こういう状況の中で、パラ選手、代表選手は生まれないんです。代表選手は毎日練習しないと駄目です。「水泳は1週間に10回せえ」って言っているんです。要は、1日3時間、4時間の練習を1週10回やらないと世界を目指せません。そういうところがないんですよ。選手自らが場所を探して練習している。本当は、競技団体から挙がった川崎の選手に対して、直接ヒアリングして「何に困っていますか」と聞いて、困っていることに対して何かサポートできることを我々として一番望んでいます。例えば、育成選手が場所がないって言うのはプールがないんですよ。じゃあ公営のプール行って、みんなが泳いでいるところで練習してそれで世界目指せるかって、そうではないんです。そこに行政が関わって、サポートできるような仕組みがあれば、そこを望んでいるということです。

(瀬戸山委員)

そうですね。第2、第3の成田さんが現れたらいいなと思っているので。

(中森顧問)

成田さんはプール何ヶ所目だっけ？

(成田共同委員長)

今行っているスイミングは7ヶ所目です。

(中森顧問)

結局7つ目のスイミングクラブでようやく毎日練習できた。レッスンとレッスンの間の休憩時間にコーチがちゃんと教えてくれたという、そういうことなんですね。現在もたぶんそんな環境に近い。

(福田市長)

それでは、パラムーブメントの広報の取組について、簡潔に事務局から説明をお願いします。

(山本オリンピック・パラリンピック推進室担当課長)

「かわさきパラムーブメント特設サイトをオープンします」という資料をご覧ください。川崎市ホームページから直接入ることができるかわさきパラムーブメントのサイトを来週オープンいたします。このサイトにたくさんの方が見に来ていただけるように、広報をしていただければというふうに存じます。以上でございます。

(福田市長)

はい。これはもうご報告ということで。ご了解願います。次は、その他の議題ですが、本日出席いただいている委員の皆さまから情報提供ということで、島さんからよろしく願いいたします。

(島委員)

はい。ご存知のように、オリンピック・パラリンピックに向けては、スポーツだけではなく文化プログラムが両輪にあるということで、私の個人の仕事として文化プログラムのことを扱うも

のが多いのですが、川崎市のパラムーブメントと関連したという観点から、取組事例を1つご紹介させていただきます。

チラシを配布させていただいていますが、4月に東京の六本木で行うロックコンサートのご案内です。主催・企画・運営、全部障害者がやっております。このチラシもデザイン、印刷に至るまで障害者がやっております。言わなければ誰も分からないレベルです。今回3回目、隔年でやっておりますが、集客数が当初900人から始まり、900、1200と順調に伸びていって、今回は1500人くらいでしょうか。

一番注目すべきは、一切補助金・寄付金いただいていること。つまり、チケット収益及び企業の協賛金で成り立っています。通常のビジネスの音楽公演と一緒に。先ほど何度も出てきた「する・観る・支える」というのがございましたが、その一歩先、自分たちが提供する側に障害者が回る、音楽の喜びを提供する。そしてそこでお金を儲けて、自分たちで収入として得て納税者になるという、小さな試みをやっております。

チラシには、「GC グランドフェスティバル」は、障害者が関わってますよということをチラシと書いてあるんですけども、主催者本人はこれは本当は書きたくないんですね。音楽の好きな人が通常のネット等でチケットを買ってくださって、自分の好きなパフォーマンスを見に来た時に、ただ会場で切符をもぎっていたり、チラシを渡したり、会場案内をしている障害者がいます。障害者がそこにごく普通に働いております。それを見て初めて気付いていただきたいというのが狙いです。就労の場をきちんとマッチングさせれば、障害者もあなたたちもみんな同じように働けるのですよ。一人でもそういう気付きを得られる機会を多く作りたいと思います。

今後川崎市で何かを展開される時、資金に非常に制約があると思うのですが、私どもは企業協賛という形をとります。これは健常者と障害者との協業です。私みたいに話す人間は営業に回って、こういう協賛金を一緒に取りに行くわけですが、こういう時に商工会議所様にあたらせていただいて、一社一社協賛依頼に行かせていただく。そうすると市財政の負担は軽く済みます。いろいろな民放等が取り上げてくれると、ロゴや社名がどんどん露出していきますので、通常のコンサートの時に協賛するのと同じイメージで協賛していただくわけです。

他方、やはりスポーツができない障害者もいる、スポーツがちょっと不得手な障害者もいます。このコンサートの主催者たちはすごく音楽が好きで、自分たちが良いと考えるものをみんなに提供したいという気持ちでいつもロックのコンサートを企画・開催するのですが、スポーツに限定せず、そうしたいろいろな場を作ることを考えていただきたいと思います。市として文化プログラム考えられる時に、アート・音楽、その他いろいろなパフォーマンスのあり方がありますので、ぜひこうした事例も参考にさせていただければと思います、本日ご紹介させていただきました。

(福田市長)

ありがとうございます。まさに、このパラムーブメントはスポーツだけではなく、いわゆる働き方、文化、あるいは住宅、住まい方とか、もろもろ含めての話なので、非常にありがたい。情報提供ありがとうございます。

それから、英国のオリンピック・パラリンピックチームの受け入れについて、現在の状況を参考資料として配布しておりますので、ご参照ください。調整中の情報も含まれているということで、この会議内に限っての情報とさせていただきます。

英国のパラリンピックの委員会や競技団体の方たちが先日川崎に来ておられますけども、先ほど話題になっておりましたとおり、宿泊問題が最大のネックとなっております。横浜のシティホテルですら、パラリンピアンが宿泊できるようなバリアフリーには全く対応していないということで、かなりそこが課題です。等々力陸上競技場はもう本当素晴らしいんですけども、問題は宿泊だということで、ほとんどの意見交換は宿泊問題だったんです。横浜も難しいということなので、そこを僕たちがどう解決するかということが今求められておまして、今日はインフルエンザで急遽ご欠席の中村委員からもご提案をいただいていたりとすとか、どうやってこの問題を解決するかというのを試行錯誤で現在取り組んでいるところです。それこそ数万円のホテルのところだと、大丈夫なんだろうと思いついていたんで、僕もちょっと驚きだったんですね。

(中澤委員)

実はアメリカだったら、例えばインターコンチネンタルとか、ヒルトンでも、必ず8%から10%

バリアフリーの部屋があるんですよ。ところが日本ではせいぜいあってもヒルトンで1部屋、それが今の日本の状況なんです。ただ、さっきも話がありましたように、今度のパラリンピックチームも70人って人数も当然ながら、受け入れられるところってなかなかないと思います。これはアメリカでもやっぱり受け入れられるわけではない。そこをいろいろ工夫しながら対応してくっていくのが実際なのかなと。あとは投資対効果なんですよね。これが難しいところがあるので、そこら辺をちょっともう少し日本らしい工夫ができないかなと思います。

(福田市長)

いろいろ時間が足りなかったですが、議事としてはこれが全てでございますので、進行を事務局にお戻しします。

(原オリンピック・パラリンピック推進室長)

ありがとうございました。最後に、事務連絡として来年度のスケジュールについてですが、第2期の推進ビジョンの策定作業に入りますので、その策定作業スケジュールを見据えながら、分科会やフォーラムを開催したいというふうに思っておりますので、新年度になりましたらまた委員の皆さまにご連絡を差し上げたいと思います。

あと、冒頭でもお話ししましたが、議事録につきましては、追って事務局から委員の発言内容等の確認のご連絡を差し上げたいと思いますので、ご協力のほどよろしくお願ひしたいと思ひます。それでは、本日は長時間にわたりましてありがとうございました。これでかわさきパラメーブメント推進フォーラムを終了させていただきます。どうもありがとうございました。

(全員)

どうもありがとうございました。

(福田市長)

ありがとうございました。